



競馬伝説の名勝負

GIベストレース

小川隆行
ウマフリ

あなたにとって

一番の名勝負は

何ですか？

歴史と格式を誇る

GI・27レース別にベスト3を選出

ここに伝説の名勝負がよみがえる！〈全81戦〉

競馬伝説の名勝負
GIベストレース

小川隆行＋ウマフリ

星海社

237



SEIKAISHA
SHINSHO

強さを競い合い、速さを競い合い、時には運まで競い合う——それが、競馬だ。

競馬の歴史とはまさに、名馬と名馬が互いに「どちらが格上か？」を試し続けてきた道のりそのものでもある。

GIの「G」は「GRADE」の頭文字から取られている。つまりはそのレースが、レースとしての格では頂点に君臨することを端的に表す強烈な呼称なのである。JRAのホームページを調べるとGIについて『競走体系上もつとも重要な意義をもつ根幹競走、GIIはGIに次ぐ主要な競走』（JRA公式ホームページ 競馬用語辞典「グレード制」から引用）と説明されている。

つまりは、JRAも『競走体系上』という前置きをしつつ、GIがもつとも重要な意義をもつことを認めている。全ての馬や人は平等ではあるが、同時にレースにはもつとも重要なものと、そうではないものがあるということだ。

この明確な格付け的な構造は、競馬を見やすくわかりやすく、そして面白くしてくれる。

世代の頂点を決めるG I競走。

世界の強豪を招くG I競走。

快速馬が集結するG I競走に、ダート馬の頂点を争うG I競走。

長い歴史を持つG I競走に、昇格したばかりのG I競走。

スタミナが問われる長距離のG I競走もあれば、牝馬たちが女王の座を争うG Iもある。

海外にだって、日本以上に多くの歴史あるG I競走がある。

そしてそれぞれのG I競走の中にもまた、とりわけ素晴らしい年、レースというのが、確かに存在する。

いまや数々の「数値」「データ」がもたらされた競馬界だが、至ってシンプルな数値といえど走破タイムだろう。しかし名勝負を名勝負たらしめるものは、必ずしもレコードタイムというわけではない。そこに至るまでの道のり、顔を合わせたライバルたち、道中での駆け引き、そしてその後の展開……。素晴らしいレースというのは、まさに数値やデータを飛び越えたところに凄まじいドラマがある。それは明確に分類・格付けされた競馬の競走体系とは違い、人それぞれの価値基準で決められていく。

今回、本書ではそれぞれのG Iに対して、競馬を愛する我々が個人的なベスト3を選定させていただいた。歴代上位タイム3傑といったわかりやすい分類ではなく、あくまでそれぞ

れの書き手が考えるベストレースを列挙し、その魅力を紹介していこうと思う。読者の皆様にとつても、領けるレースから意外なレースまで、様々なレースが掲載されていることだろう。

歴史的な名馬が完勝したダービー、超スローの末脚勝負となったダービー。

圧勝劇が繰り広げられた有馬記念、ブービー人気が逃げ切った有馬記念。

悔しい思いをした凱旋門賞、悲願を達成した香港ヴァーズやドバイワールドカップ。

皆様にとつてのベストレースは、果たして掲載されているだろうか？ 言うだけ野暮ではあるが、ここで紹介したレースが全てにまさる決定版というわけではない。皆様がより深く競馬を愛し、そして楽しむためのきっかけとなる一冊としてほしい。知らなかったレースとの出会い、そして知っていたレースの新たな一面との出会いをサポートできれば幸いだ。

さあ、それでは、競馬界の頂点に格付けされた舞台で繰り広げられた、数々のドラマを語っていきこう。

緒方きしん

Part 1 最高の栄誉をめざして「3歳三冠路線」6レース 13

皐月賞

「最も速い」のみならず！
パワー&器用さ、完成度も必要な一冠目 14

桜花賞

80年以上の歴史を誇るクラシック第一弾
若き牝馬がしのぎを削る「仁川の春」 44

日本ダービー（東京優駿）

騎手、調教師、馬主、生産者…
誰もが勝利を夢見る「最高の舞台」 24

オークス（優駿牝馬）

「優駿牝馬」Ⅱ乙女たちのダービー
何かが起こる2400mの未知の舞台 54

菊花賞

春の実力馬VS夏の上がり馬
3歳世代クラシック競走の終着駅 34

秋華賞

エリザベス女王杯に代わって創設された
牝馬三冠最終戦 64

競馬note 1 菊花賞に間に合った 競馬史上最強の上がり馬 74

Part 2 真の実力王者を決める「古馬王道路線」6レース 75

大阪杯

2017年GI昇格の中距離戦
旧「スーパーGI」は春古馬三冠に 76

天皇賞・春

古馬ステイヤール日本一決定戦
平地GI最長距離を誇る「春の盾」 86

宝塚記念

仁川で開催される「春のグランプリ」
華を添える独自ファンファーレ 96

天皇賞・秋

150回を超える王道GI「秋の盾」
スピード＋スタミナ＝王者の総合力 106

ジャパンカップ

格付けランクの過去最高は世界3位
日本の競馬を発展させた象徴レース 116

有馬記念

年末の風物詩でもあるグランプリ
日本中が注目する「日本のレース」 126

Part 3 快速馬たちの頂上決戦「マイル・スプリント戦」5レース 137

安田記念

短距離馬と中距離馬が激突する
春のマイル王決定戦 138

高松宮記念

春のスプリント王者決定戦は
唯一のローカル競馬場芝GI 162

マイルチャンピオンシップ

関西競馬場初となる短距離GI
名馬が居並ぶ歴代の優勝馬 146

スプリングターズステークス

短距離の名馬を何頭も輩出してきた
秋GIシリーズ初戦のスプリントレース 170

NHKマイルカップ

ダービートライアルの側面ももつ
3歳マイル王決定戦 154

競馬note 3 GI以上の盛り上がり!? GI馬が集結する「スーパーGI」 178

Part 4 華やかな女王&次世代若駒 「牝馬限定&2歳限定」5レース

179

エリザベス女王杯

昔は牝馬三冠目、今は牝馬日本一決定戦
3歳VS古馬 牝馬の熱き戦い 180

阪神ジュベナイルフィリーズ

かつては関西の2歳王者決定戦
現在は「2歳女王決定戦」 204

ヴィクトリアマイル

牝馬マイル路線の拡充のために創設された
春のスピード女王決定戦 188

ホープフルステークス

GⅢ戦からGI戦へ昇格
若き2歳馬たちの「出世レース」 212

朝日杯フューチュリティステークス

70年以上の歴史を誇る
2歳チャンピオン決定戦 196

Part 5 砂の王者&世界の頂点を争う「ダート戦&海外GI」5レース 221

フェブラリーステークス

GⅢからGⅡ、そしてGⅠ戦へ昇格

GⅠシリーズ開幕戦Ⅱ砂の王者決定戦 222

香港国際競走

日本競馬の名脇役

香港でいざ主役の座へ 242

チャンピオンズカップ

かつての名称は「ジャパンカップダート」

中京開催「ダート王者決定戦」 230

ドバイワールドカップデー

重苦しく悲痛な空気が漂った日本

中東から届いた大金星のニュース 246

凱旋門賞

悲願達成寸前でかわされ…

「世界の壁」の高さを知った夜 238

競馬
note 5 ワールドクラスの衝撃 海外からやってきた女傑たち 250

おわりに 251

執筆者紹介 254

各馬データ・レコードなどの表記は2022年10月現在のものです。

写真／JRAフォト、日刊スポーツ新聞社

フォト・チエスナット、アフロ

図版／ジェオ

馬名索引 (五十音順)

アーモンドアイ	118	キングカメハメハ	156
アグネスタキオン	218	キングヘイロー	168
アグネスデジタル	152	クイーンズファンテ	187
アドマイヤコジーン	144	グランアレグリア	176
ア.パ.ネ	195	クロフネ	160
ヴィクトワールヒサ	246	ゴールドシップ	88
ウオッカ	108	コントレイル	16
エアグルーヴ	62	サートウルナリーア	214
エイシンフラッシュ	33	サイレンススズカ	98
エルコンドルパサー	240	サウンドトウル	237
オグリキャップ	148	サクラバクシンオー	172
オグリローマン	52	ジュンテイルドンナ	124
オルフェーヴル	134	ジャスタウェイ	249
カツラギエース	125	シンコウウインディ	224
カネヒキリ	236	ステイゴールド	242
カレンチャン	164	ステイルインブラ	73
キズナ	85	ステインガー	211
キセキ	43	ストリートガール	194
キタサンブラック	78	スワーヴリチャード	84
		セイウンスカイ	42
		ソダシ	190
		タイキシャトル	153
		タイトルホルダー	104
		ダイワメジャー	114
		デアリングタクト	66
		ディーフィンパクト	26
		ティエムオヘラオー	241
		トウカイテイオー	32
		トウザヴィクトリー	186
		トランセンド	228
		ナリタタイシン	23
		ナリタブライアン	36
		ノンコノユメ	229
		ハーツクライ	129
		ハートレイク	145
		ハーフスター	46
		ビートブラック	95
		ヒシアマゾン	206
		ヒシミラクル	105
		ピンクカメオ	161
		ブエナビスタ	63
		フジキセキ	198
		フラワーパーク	169
		ヘヴンリーロマンス	115
		ホクトベガ	182
		ホツコータルマエ	232
		マイネルラヴ	177
		マルセリーナ	53
		メジャーエンブレム	210
		メジロドーベル	72
		メジロパーマー	135
		メジロブライト	94
		モーリス	244
		ヤマニンゼファー	140
		ラヴズオンリーユー	56
		ラニ	248
		レイデオロ	219
		ローズキングダム	202
		ロードカナロア	245

Part 1

最高の榮譽をめざして

「3歳三冠路線」

6レース

皐月賞

日本ダービー

菊花賞

桜花賞

オークス

秋華賞

皐月賞

「最も速い」のみならず!

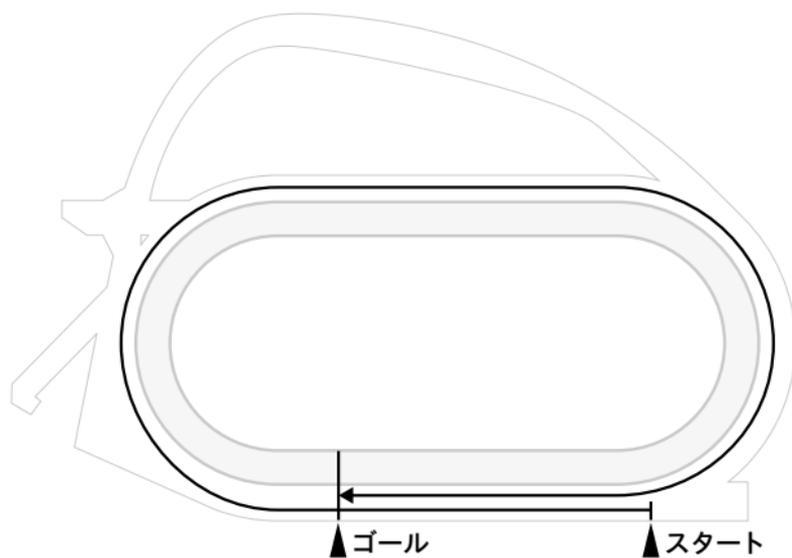
パワー&器用さ、完成度も必要な一冠目

「皐月賞は最も速い馬が勝つ」と言われるが、それほど単純なものではない。皐月賞馬に求められる条件は、「スピード」、「パワー」、「器用さ」、「完成度」の4つだと私は考えている。まず、「スピード」については、中山競馬場の内回りを使うコースは先行馬に有利であり、前のポジションをとるために秀でたスピードが求められる。スタミナに関しては、2000mまでこなせるマイラーであれば、十分に勝負になるはず。「パワー」については、皐月賞は中山開催の最終日に行われるため、馬場が重くなっていることが多い。そのため、荒れ馬場をこなせるパワーが必要となる。さらに、1周1667m、直線310mという小さなスケールのトラックで行われるため、上手に立ち回りながら流れに乗ることができる「器用さ」を備えているかどうかも問われる。そして「完成度」の高い馬ということも挙げられる。その傾向は年々強くなってきており、この時期においてあらゆる面において完成されていなければ、皐月賞を勝つことは難しい。素質があり、なおかつ完成度が高いことが求められる。



中山競馬場 芝2000m

〈レースレコード〉 1分57秒8
アルアイン
2017年4月16日



コーナー4つの小回りコース（内回り）。310mの直線には2.2mの急坂が待ち受けており、器用さと坂に屈しないパワーが求められる。2か月連続開催の最終週で荒れ馬場になり時計もかかる。

【私が選んだベストレース】 治郎丸敬之（「ROUNDERS」編集長）

順位	開催日	馬名	選出理由
第1位	第80回 2020年4月19日	コントレイル	当歳の頃に出会ったコントレイルが、課題を克服しながら成長を遂げ、圧倒的な強さで勝ったことが感慨深い。
第2位	第59回 1999年4月18日	テイエムオペラオー	野平祐二氏も絶賛したテイエムオペラオーの力強さとピッチ走法が光ったレース。
第3位	第53回 1993年4月18日	ナリタタイシン	若かりし頃の武豊騎手がナリタタイシンを駆って、ベテランの岡部幸雄騎手と柴田政人騎手を出し抜いたレース。



2020年 第80回

コントレイル

完璧に立ち回ったサリオスを型破りの戦法でブッコ抜いて一冠目

競馬を始めて最初の数年間は、好きな馬ができて、どんなレースでも勝つと信じて追いかけてたりした。シンコウラブライやヒシアマゾン、ブラックホークなど、その当時の甘酸っぱい思い出と共に、今でも鮮明に彼女たちの走りの記憶が蘇ってくる。しかし、競馬を知れば知るほど、無邪気な心は少しずつ消えてゆき、最近は好きな馬がいなくなってしまうた。それでも、思い入れのある馬はいる。コントレイルはそんな数少ない1頭である。好きな馬や思い入れのある馬がいるからこそ、それぞれの競馬ファンにとっての名勝負が生まれるのだと私は思う。好きという感情や思い入れがなければ、競馬はただのギャンブルであり、サラブレッドたちは単なる記号にすぎない。だからこそ、私にとつての名勝負を語るためにも、私の思い入れを少しばかり語らせてもらいたい。

2017年、北海道の門別に新設されたノースヒルズ清阜にて、数頭の当歳馬を披露してもらった中、際立って目立つ存在の馬がいた。とにかく動きが軽く、首を使って柔らかく歩

き、大人びた雰囲気をもとっていた。大げさかもしれないが、手脚が地面から少し浮いているような感じを受けた。見惚れていたが、慌ててカメラを手に取り、ほんの一瞬だけ、その姿を記録に収めることができた。まだ名もなきその馬について、私は頭の片隅に、「ノースヒルズ、ディープリンパクト、母の父アンブライドルズソング」とだけ刻んでおいた。

いつしかそのような馬がいたこともすっかり忘れ、19年暮れのホープフルSの出走馬柱を見渡し、コントレイルの血統構成を見たとき、突然、当時の記憶がフラッシュバックした。あのとときの当歳馬はもしかするとコントレイルかもしれない。2年前に撮影した写真をひっくり返して探してみたところ、その額にある受話器のような流星の形が見事に一致した。「モシモシ君」というあだ名をつけていたというのは、あとから聞いたこぼれ話である。

ホープフルSの口取りが終わり、ノースヒルズのスタッフにお祝いの言葉をかけつつも、私はつい余計なことを口走ってしまった。「もう少し落ち着いて、どっしりと構えられるようになるといいですね。距離が延びる来年のクラシックに向けての課題かもしれません」。そう言ったそばから、生産のプロに対して素人が何を偉そうなことをと大いに反省したのだが、懐の広い彼らは「そうですね」と優しく返してくださいました。なぜ私がそんなことを言ったかという、前年の覇者サートウルナリアは、GIレースを勝利した直後とは思えないほど落ち着いて、堂々と歩いていたのを間近で見たからである。サートウルナリアと比べてコ

ントレイルは、パドックでもレース後も興奮してチャカつきが見られたので、良かれと思つて口にしてしまったのだ。

4か月後、皐月賞のパドックにおけるコントレイルの姿を見て、私は驚きを隠せなかった。そして同時に、胸を撫でおろして安堵した。コントレイルがまるで昨年とは別馬のように落ち着いて堂々と歩いていたからである。馬体はそれほど変わっていなかったが、精神的に大きく成長したのは誰の目にも明らかであった。私は一人、静かに頭を下げた。失礼なことを言つてしまい、ごめんなさい。あの瞬間、私たちの気持ちは皐月賞を飛び越え、日本ダービーから三冠制覇へと向かった。

皐月賞のゲートが開いた。前半1000mが59秒8、後半が60秒9と、馬場が渋つてややラストの時計が掛かったことを考慮すると、およそ平均ペースで流れた。前年の朝日杯フューチャーティスを好時計で勝ち、無敗のまま臨んできたサリオスが教科書どおりに先行し、皐月賞を勝つための理想的な走りをしているのと対照的に、コントレイルは思っていたよりも後ろのポジションになつてしまったように私の目には映つた。それでも、福永祐一騎手は自信を持つてコントレイルに騎乗していた。皐月賞を勝つただけのレースはしない。次の日本ダービーを見据えていたからこそ、前半も無理について行かずに冷静でいられたのだろう。

皐月賞を勝つために求められる「スピード」と「パワー」、「器用さ」、「完成度」の全てを備えていたのは、実は2着馬のサリオスの方であった。そのサリオスが完璧なレース運びをして、勝負どころで馬群から抜け出そうとしていたそのとき、後方から1頭だけコントレイルが次元の違う脚で外をまくってきた。両馬の馬体が併さったのも一瞬だけ。グッと前に出たコントレイルは半馬身の差をつけてそのままゴール。サリオスは横綱相撲をしたにもかかわらず、もう1頭の横綱にあっさりと寄り切られてしまったのだ。コントレイルさえいなければ、サリオスの完勝で終わった皐月賞であった。3着以下を3馬身以上離しているのだから、皐月賞馬が2頭いたと言っても過言ではない。

コントレイルの皐月賞のすごさは、日本ダービーを見据えた走りをしつつ、皐月賞を勝つための資質を全て備え、完璧なレース運びをしたサリオスを、まるで赤子の手をひねるようにあっさりとねじ伏せてしまったところにある。あの小さかったモシモシ君が、肉体的にも精神的にも大きく成長し、まさか皐月賞をこんなにも強い勝ち方をする名馬になるとは。思い入れがある分だけ競馬は感動も大きくなる。コントレイルとこの皐月賞は、そんな当たり前前のことを、久しぶりに思い出させてくれた名馬であり、名勝負であった。

4番手を進んだサリオスを一瞬の脚で差し切ったコントレイル。上がりタイムはメンバー中唯一の34秒台だった。





2020年 第80回

皐月賞

優勝 **コントレイル**

生 誕 2017年生まれ

性 別 牡

毛 色 青鹿毛

父 ディーブインパクト

母 ロードクロサイト

母の父 Unbridled's Song

最終戦績 [8-2-1-0]

主な勝鞍 ホープフルS 皐月賞 東京優駿 菊花賞
ジャパンC 神戸新聞杯 東京スポーツ杯2歳S

2着 サリオス 3着 ガロアクリーク

賞位
第2位
卓月賞

1999年 第59回

テイエムオ。ヘラオー

2強ではなく3強であることを
世に知らしめた

卓月賞は牡馬クラシックの第1戦であり、同世代のトップホースたちの力関係が明らかになるレース。どの馬が果たして強いのか、競馬ファンの妄想が現実になるレースとも言える。その中でも特に衝撃を受けたレースは、1999年の卓月賞である。前哨戦である弥生賞を完勝したナリタトップロードと鋭い末脚で差して惜しくも届かなかったアドマイヤベガの2頭が、名実ともにクラシック戦線を引っ張っていくと私は考えていた。当日は小雨が降りしきる中、発表こそ良馬場であったが実質は重い馬場でレースは行われた。勝負どころでナリタトップロードとアドマイヤベガが促されてもなかなか進んで行けずに苦労する中、1頭だけ抜群の手応えで後方から大外をブン回して追い込んできた馬がいた。テイエムオペラオーである。前肢の力強さとピッチ走法はヨーロッパの馬のそれであり、ミスター競馬と呼ばれた野平祐二氏が絶賛したのが強烈に記憶に残っている。それほど強さであった。正直に言うと、私はそのとき初めてテイエムオペラオーの名を聞いた。ナリタトップロードとアドマイヤベガばかりに気を取られて、テイエムオペラオーはノーマークであった。2強ではなく、実は3強だったのだ。

生 誕 1996年生まれ
性 別 牡
毛 色 栗毛
父 オペラハウス

母 ワンスウエド
母の父 Blushing Groom
最終成績 [14-6-3-3]
主な勝鞍 卓月賞 天皇賞・春(2勝) 宝塚記念 天皇賞・秋 ジャパンC 有馬記念 京都記念 阪神大賞典 京都大賞典(2勝) 毎日杯



1993年 第53回

ナリタタイシン

名手たちの仕掛けの
タイムリングが勝敗を分けた

名馬に名ジョッキーが乗ると名勝負になる。1993年の皐月賞はそのようなレースであった。ウイニングチケットには柴田政人騎手、ビワハヤヒデには岡部幸雄騎手、そしてナリタタイシンには武豊騎手が騎乗していた。人気も今挙げた順番のとおり。実はこの人気順がレースの結果を分けることになる。大外枠からスタートしたビワハヤヒデは先行力を生かして外の3番手につけ、内枠を引いたウイニングチケットは、前半は無理をせず後方からレースを進めた。さらにその後ろの届きそうもないポジションをナリタタイシンは走っていた。レースが動いた、いや動かざるを得なかったのは、1番人気を背負っていたウイニングチケットと柴田政人騎手である。勝負どころから脚を使ってビワハヤヒデを追いかけに行き、そこからふた呼吸置いてゴールサインを出したのが武豊騎手。この仕掛けのタイムリングの差によって、ゴールにおける着順が決まることになった。最初に動き出したウイニングチケットは直線で失速してしまい、追い出しを待ったビワハヤヒデは2着、そしてギリギリまで待って、弓矢を放つように仕掛けたナリタタイシンと武豊騎手が見事にゴール前で差し切ったのだ。わずかな挙動が勝敗を分けた、名馬と名手たちによる名勝負であった。

(治郎丸敬之)

生 誕 1990年生まれ

性 別 牡

毛 色 鹿毛

父 リヴリア

母 タイシンリリイ

母の父 ラディガ

最終戦績 [4-6-1-4]

主な勝鞍 皐月賞 目黒記念 ラジオたんぱ杯3歳S

日本ダービー（東京優駿）

騎手、調教師、馬主、生産者…

誰もが勝利を夢見る「最高の舞台」

18世紀からの歴史を持つと言われているイギリスのダービーステークス。その英ダービーをモデルとして1932年（昭和7）に創設されたのが、日本の東京優駿である。ダービーといえば、競馬の開催国であればどこでもあるものと言って良いだろう。各国の競馬関係者にとって、ダービー制覇は喉から手が出るほど欲しい榮譽である。世代の頂点を決める一戦であり、ダービーに向けて逆算してデビューのタイミングを決める陣営も少なくない。

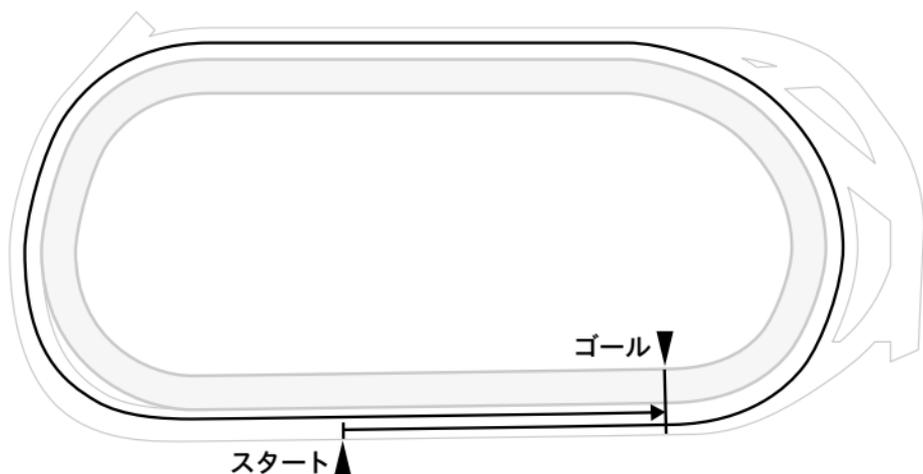
日本国内の初代ダービー馬は、ワカタカ。それ以降も、名牝ヒサトモや三冠馬セントライトなど、創設されてから最初の10年間でも歴史に名を残す馬がズラリと並ぶ。それもそのはずで、ダービーを勝利した時点で既に「歴史に名を残す馬」とも言えるからだ。

日本では皐月賞・菊花賞と比較して「最も運のある馬が勝つ」と表現されることもある東京優駿。枠順の有利不利などもあるレースではあるが、確かにこのレースの勝ち馬たちにはただならぬ運を引き寄せる力を感じる馬も多いように感じられる。



東京競馬場 芝2400m

〈レースレコード〉2分21秒9
ドウデュース
2022年5月29日



1周2120.8m（Cコース）とJRA競馬場の中で2番目のロングコース。左回り525.9mの直線途中には2mの急坂があり、スタミナが必要。開幕直後は時計も速い。内枠がやや有利。

【私が選んだベストレース】 緒方きしん（「ウマフリ」代表）

順位	開催日	馬名	選出理由
第1位	第72回 2005年5月29日	ディーブインパクト	無敗でダービーに挑んだディーブインパクト。天才・武豊騎手とともに破格の強さを見せて三冠を確信させた。
第2位	第58回 1991年5月26日	トウカイテイオー	皇帝から帝王へ受け継がれた強さ。このあと待ち受ける困難とドラマを感じさせない、驚異のダービー独走。
第3位	第77回 2010年5月30日	エイシンフラッシュ	ヴィクトワールピサ、ペルーサ、ルーラーシップ…。強力な相手を差し切った伏兵は、皐月賞3着の実力派。



2005年 第72回

デイープリン。ハクト

名手を背に無敗のダービー制覇、完璧なレースで世代の頂点へ

ダービーは世代の頂点を決める一戦。最も運のある馬が勝つとも言われるレースだが、それだけでなく最も速い馬が勝つと言われる皐月賞、最も強い馬が勝つと言われる菊花賞も勝利して三冠を獲得する馬というのは、どれほどの運と縁に恵まれているのだろうか。

数々の名馬が誕生した中で「日本近代競馬の結晶」とも称されたのが、日本競馬史上6頭目の三冠馬、デイープリンパクト。しかし彼の母であるウインドインハーヘアはアイルランド生まれのイギリス調教馬であり、父もアメリカから輸入されたサンデーサイレンスである。単純に見れば「日本近代競馬の結晶」とは呼ぶのに躊躇いがある血統と言えるだろう。

しかし名馬は、血統だけでなく、周囲の弛まぬ努力により生まれる。

デイープリンパクトの生産は、当時すでに日本を代表する牧場となっていたノーザンファーム、オーナーは04年ダービー馬キングカメハメハなどを所有していた金子真人氏。そしてメジロマツクイーンやステイゴールドといった数々の名馬を管理してきた池江泰郎調教師の

もとに、チーム・ディープリンパクトは結成された。

その馬を任されたのが日本を代表する武豊騎手というのも、まさにディープリンパクトが「ディープリンパクト」であった大きな理由のひとつだろう。これは、競馬ファン以外からも広く知られる人物であった武豊騎手の凄みを受け止めたのが、同じく天賦の才を持つディープリンパクトであったという見方もできる。

ディープリンパクトはデビュー前から注目を集めた素質馬だった。デビュー戦では単勝1・1倍に応えて圧勝。すぐさま、競馬メディアで取り上げられるようになった。年が明けると、若駒S、弥生賞と快勝。スタートで大きく躓いてしまった皐月賞を乗り切って一冠目を制すると、競馬以外のメディアでも大きく扱われるようになる。世紀の一戦となったダービーで単勝1・1倍の評価を受けた武豊騎手とディープリンパクトを出迎えたのは、武豊騎手と縁の深い馬たちだった。

ダービーのゲートが開くと、縦長の隊列が形成された。おそらくディープリンパクトを意識してのことだろう。あえてディープリンパクトよりも後方にポジションをとる馬がいる一方で、先行勢もディープリンパクトを見据えてペースを作り上げていく。先頭との差が広がり、通常であればやや厳しそうなポジションに収まったが、それでも鞍上・武豊騎手は堂々とディープリンパクトをなだめた。レースを引っ張るのは、コスモオーステインとシャドウ

ゲイト。コスモオースティンの鞍上には武幸四郎騎手がいた。初コンビとなった前々走・毎日杯では、武豊騎手が騎乗する3番人気カネヒキリらに先着する2着と好走し、今回も上位進出を狙う1頭であった。

中団の1頭はアドマイヤジャパン。こちらは母ビワハイジという良血馬である。ビワハイジは現役時代、武豊騎手とのコンビでデビュー2連勝で札幌3歳Sを制覇。阪神3歳牝馬Sでは角田晃一騎手に乗り替わり、武豊騎手・イブキパーシヴを相手に勝利をあげている。同じく中団に構えるパールギユントは重賞2勝の実績馬。年明けに勝利したシンザン記念は、武豊騎手との初コンビを組んだレースでもあった。

さらにその後方にはアドマイヤフジが控える。アドマイヤフジの父であるアドマイヤベガは、武豊騎手を背にダービーを制した馬。アドマイヤフジもデビューから5戦目までは武豊騎手とコンビを組んでいた馬で、共に若葉Sも制していたが、ディープリンパクトと初めてぶつかった皐月賞からは福永祐一騎手とコンビを結成していた。後方から機をうかがうのは、4番人気馬ローゼンクロイツと安藤勝己騎手。鞍上に安藤勝己騎手を迎えたのは3戦目の京都2歳Sからで、本馬を初勝利に導いたのは、やはり武豊騎手だった。

世代の頂点を決める一戦に、武豊騎手と縁ある馬が多く集結する。その馬たちが「対ディープリンパクト」の戦略を練り、全力でぶつかる。それこそ、日本競馬界を象徴する出来事

のひとつに感じられた。

直線に入ると、ディープリンパクトは早くも先頭に並びかける。内側で粘るインテイライミを横目に、大外から伸び続けた。実況がディープリンパクトの名を叫び、カメラがディープリンパクトを映す。2着に5馬身差をつけたところがゴールだった。

まさに、完勝。ナリタブライアン以来登場していなかった三冠馬だが、それすらあくまで通過点と思わせるほど余裕の勝利だった。むしろ菊花賞の先に広がる未来に期待が膨らんだ。

2着のインテイライミは、武豊騎手をダービージョッキーにした名馬スペシャルウィークの産駒。3着のシックスセンスは神戸新聞杯で2着、菊花賞で4着、香港ヴァーズで2着と好走したが、長い間、未勝利戦の1勝のみだったため「最強の1勝馬」として人気を集める。怪我で引退する直前、結果的にラストランとなった京都記念で初めて鞍上に武豊騎手を迎え、念願の2勝目をあげている。

デビューから引退まで、武豊騎手とコンビを組んでいたことも、ディープリンパクトの持つ強運によるものだったのだろう。

そして「日本近代競馬の結晶」、ディープリンパクトは引退してから種牡馬としても活躍。自身のダービー制覇の8年後にダービーを制したキズナの背には、やはり武豊騎手がいたのだった。



2005年 第72回

日本ダービー

優勝 ディープインパクト

生誕 2002年生まれ

性別 牡

毛色 鹿毛

父 サンデーサイレンス

母 ウインドインハーヘア

母の父 Alzao

最終戦績 [12-1-0-1]

主な勝鞍 皐月賞 東京優駿 菊花賞 天皇賞・春 宝塚記念 ジャパンC
有馬記念 弥生賞 神戸新聞杯 阪神大賞典

2着 インティライミ 3着 シックスセンス

2着インティライミとの
着差は5馬身。史上最強
馬のダービーは「圧勝」
の一言だった。

日本
ダービー
第2位

1991年 第58回

トウカイテイオー

皇帝の血を引く帝王が
ダービーですら他馬を圧倒

12月にデビューしたトウカイテイオー。デビューから5連勝で皐月賞を制覇すると、世間ではトウカイテイオーの三冠を確実視するムードとなっていた。トウカイテイオーの父は、三冠馬シンボリルドルフ。親子での三冠となれば、前例のない偉業だ。デビューから鞍上を務める安田隆行騎手を背に東京競馬場に現れた「帝王」は、すでに王者の風格を漂わせていた。

トウカイテイオーのライバル筆頭は、青葉賞勝ち馬レオダーバン。素質馬が集う中、皐月賞に出走しなかったレオダーバンが2番人気となり皐月賞2着のシャコーグレイド、3着のイイデセゾンがそれぞれ3番人気、4番人気になったのは、皐月賞でトウカイテイオーがつけた1馬身差に対して、詰められない何かを感じたからだろうか。

レースでは、トウカイテイオーが早めに抜け出す横綱競馬。自身をマークする形でレースを進めていたレオダーバンを一瞬で引き離すと3馬身差をつけてゴールした。鞍上は観衆の声援にガッツポーズで応える。まさに王道の勝利。無敵の強さを感じさせた。

しかしトウカイテイオーのドラマはここから。怪我による菊花賞回避や復活の有馬記念…数々の感動を巻き起こす伝説の、ある意味では伝説の序章とも言えるダービー制覇だった。

生 誕 1988年生まれ
性 別 牡
毛 色 鹿毛
父 シンボリルドルフ

母 トウカイナチュラル
母の父 ナイスダンサー
最終戦績 [9-0-0-3]
主な勝鞍 皐月賞 東京優駿 ジャパンC 有馬記念
産経大坂杯



2010年 第77回

エイシンフラッシュ

伏兵に甘んじた皐月賞3着馬が
並み居る素質馬を差し切る

当時、史上最強世代という声もあった2010年クラシック世代。ダービーではヴィクトワールピサやローズキングダムといった皐月賞上位組に加え、トライアル組からもペルーサやルーラーシップといった才能溢れる名馬が集結し、ファンは大いに盛り上がった。

皐月賞組は勝ち馬ヴィクトワールピサが1番人気、2着馬ヒルノダムールが3番人気とレース結果を反映していたが、その皐月賞で11番人気ながら3着に食い込んだエイシンフラッシュは、ダービーでも伏兵評価の7番人気に甘んじていた。未完の大器ペルーサが出遅れずに出るか、ヴィクトワールピサの父である新興勢力の種牡馬ネオユニヴァースが2年連続でダービー馬を輩出するか…。力関係の不明な一戦を、ファンは固唾を呑んで見守った。

逃げるアリゼオが作り出したのは、驚くほどのスローペース。各馬が睨み合って直線に向くと、完全なる末脚勝負となった。まず抜け出そうとしたのはローズキングダム。2歳王者が栄冠を手にするかと思いきや、鋭い末脚で差し切ったのが、伏兵・エイシンフラッシュだった。当時は思いも寄らない決着に気落ちしたファンもいたが、エイシンフラッシュは12年に天皇賞・秋を制覇。あの勝利がフロックではなかったことを証明した。

(緒方きしん)

生誕 2007年生まれ
性別 牡
毛色 黒鹿毛
父 キングズベスト

母 ムーンレディ
母の父 フラティニ
最終鞍馬 [6-3-7-11]
主な勝鞍 東京優駿 天皇賞・秋 毎日王冠 京成杯

Part **5**

砂の王者&世界の頂点を争う

「**ダート戦&海外GI**」

5レース

フェブラリース

チャンピオンズC

凱旋門賞

香港国際競走

ドバイWCデー

フェブラリーステークス

GⅢからGⅡ、そしてGⅠ戦へ昇格

GⅠシリーズ開幕戦Ⅱ砂の王者決定戦

まだ厳しい寒さの残る、2月の東京競馬場で施行される、フェブラリース。寒風を切り裂き、砂塵を巻き上げる砂の熱戦は、その年のGⅠの開幕を告げる風物詩でもある。

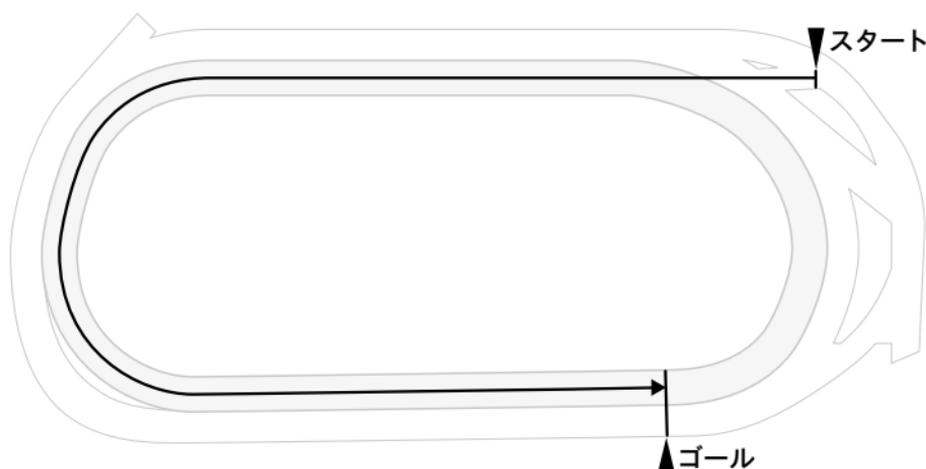
1984年（昭和59）に創設されたGⅢフェブラリーハンデキャップを嚆矢とし、ダート路線の拡充とともに、94年にはGⅡの別定戦、そして97年には中央競馬史上初のダートGⅠと変遷を遂げてきた。現在は、明け4歳馬と歴戦の古馬が激突する、砂の猛者たちの頂上決戦として位置づけられており、このレースから3月下旬にアラブ首長国連邦で開催されるドバイワールドCへと挑戦する強豪馬も多い。

舞台となる府中のダート1600mのコースは、中央競馬唯一となるダートのマイル戦であり、長い直線と上り坂を克服するパワーと、タフな底力が要求される。またそれに加え、芝コースからのスタート、左回りのワンターンと、国内における他のダートコースとは一線を画す舞台設定のため、コース巧者やリピーターの多いGⅠでもある。



東京競馬場 ダート1600m

〈レースレコード〉1分33秒8
カフェファラオ
2022年2月20日



芝コースと同じく直線には高低差2.4mの急坂が控えている。3コーナーの下り坂はスピードが落ちにくいスパイラルカーブ。ダート戦は砂を被らない先行が有利だが差し・追い込みも決まりやすい。

【私が選んだベストレース】 大寄直人（文筆家・心理カウンセラー）

順位	開催日	馬名	選出理由
第1位	第14回 1997年2月16日	シンコウウィンディ	初の「砂のGI」を制した、漆黒の勝負服。のちの日本馬の偉業は、砂の猛者たちが紡いできた歴史の先に。
第2位	第28回 2011年2月20日	トランセンド	乾坤一擲の藤田伸二騎手、怖れなき逃げ。その走りは、震災禍の日本に希望を届けたドバイワールドCでの快挙へと。
第3位	第35回 2018年2月18日	ノンコノユメ	6歳騙馬が見せた、閃光のごとき末脚。異例の決断から1年半の時を経て結実した、GI勝利。



1997年 第14回

シンコウウインデイズ

記念すべき第1回の「砂のGI」、新時代を告げる不良馬場での熱戦

芝の上での切れ味と底力を研いできた血があるように、砂の上を疾駆するパワーとタフさを蓄えてきた血がある。サラブレッドが疾走する美しさに、強さに、その走りを観る者に宿す熱に、芝もダートもない。しかし、「八大競走」がすべて芝のレースであるように、長らく我が国の競馬においては、芝とダートの間には明確な上下構造があった。

その潮目が変わり始めたのが、1995年だった。中央地方交流元年とされたこの年、多くのダートレースが交流競走として解放され、ダートの高額賞金競走の増設などが進められた。97年のフェブラリーSは、それを祝うように施行された、初めての「砂のGI」だった。97年2月16日。不良馬場のダートコースに初めて鳴り響く、GIのファンファーレ。ゲートが開き、向こう正面に駆けていく16頭の砂の猛者たち。ペースはそれほど上がらず、各馬一団となって府中の大櫓を過ぎていく。迎えた直線、横山典弘騎手のバトルラインが先頭に立ち、外から熊沢重文騎手のストーンステッパーも並びかける。しかし、岡部幸雄騎手に内

へ導かれたシンコウウインデイが、差し脚を伸ばす。シンコウウインデイには、併せた馬に噛みつきにくい悪癖があったが、この日は鞍上の左鞭に応えて真っ直ぐに伸びた。なおも食い下がるストーンステッパー。重なる、2つの馬体。熱を帯びる、府中のダート直線。やがて、シンコウウインデイがクビ差抑えて、初めてのGIのゴール板を通過した。寒風を切り裂く、ダートの猛者たちの熱き走り。それは、観る者にこう語りかける。

見たか、この走りを。泥跳ねをもともしない、この逞しさを。天と地をつなぐ柱のごとく泥田を踏みしめる、この四肢の力強さを。この国の競馬を、支えてきた走りだ。胸を張れ、今日という日を。誇れ、己が血を。この熱戦よ、新たな時代の歓喜となれ――。

あれから四半世紀近くが過ぎた、21年11月6日。海を渡った5歳牝馬のマルシユロレーヌが、米・ブリーダーズCディスタフを勝利した。日本調教馬初の、海外ダートGI制覇の大偉業を成し遂げた走りだった。それはおそらく、この国を支えてきた有名、無名の砂の猛者たちが連綿と受け継いできた歴史の、その切っ先に宿った快挙だった。

浦河で生を享け、米国産の父・デュラブの血を引く、母・ローズコマンダーの最後の産駒。荒ぶる気性と、類まれなる勝負根性を備えた、栗毛の馬体。漆黒の勝負服を纏った名手に導かれ、泥田のごときダートの上で、初めてGI馬として輝いた、シンコウウインデイ。

かの雄姿と熱戦を、そして紡がれてきた砂の歴史を。ゆめゆめ、忘れることなかれ。



1997年 第14回

フェブラリーステークス

優勝 シンコウウインディ

生誕 1993年生まれ

性別 牡

毛色 栗毛

父 デュラブ

母 ローズコマンダー

母の父 ダストコマンダー

最終戦績 [5-3-1-8]

主な勝鞍 フェブラリーS ユニコーンS 平安S

2着 ストーンステッパー 3着 バトルライン

G1昇格1年目の記念すべきレース。ダート路線の新たな扉を切り拓いたシンコウウインディ&名手岡部幸雄。

2011年 第28回

トランセンド

まさに乾坤一擲
名手が仕掛けた怖れなき逃亡劇



2011年2月20日、日曜日。藤田伸二騎手は、府中で1鞍のみの騎乗だった。乾坤一擲。その日の全精力を、フェブラリースに懸けていたことは想像に難くない。

騎乗するトランセンドは、新設重賞だったレパードSを制するなど、その才は他を圧倒するものがあつたが、もまれると脆い一面も見せていた。しかし4歳の5月、鞍上に藤田騎手を迎えたことで、「逃げ」を自分の形にしていく。その冬にはGIジャパンCダートを制覇、そこから前哨戦を使わずにGI連勝を懸けて、この11年のフェブラリースに臨んだ。

トランセンドはハナを切ったものの、道中はマチカネニホンバレに馬体を外から併せて競られる、相当にハードな展開。しかし迎えた府中の長い直線、藤田騎手の檄に応えて、トランセンドは先頭を譲らない。追い込んできたフリオーソも抑えて、GI連勝を成し遂げた。トランセンドと藤田騎手が見せてくれたのは、ひたむきに、真つ直ぐに前を見据えた、怖れなき逃げだった。そしてその勇氣は、レースの1か月後、海を渡ったドバイワールドCの大舞台でも、何ら変わることもなく見せてくれた。ヴィクトワールピサの2着、日本馬ワンツ。その姿は、東日本大震災に見舞われた日本に、希望を届ける快拳として記憶される。

生涯 2006年生まれ
性別 牡
毛色 鹿毛
父 ワイルドラッシュ

母 シネマスコープ
母の父 トニービン
最終戦績 [10-5-1-8]
主な勝鞍 ジャパンCダート(2勝) フェブラリース
みやこS マイルCS南部杯



2018年 第35回

ノンコノユメ

陣営の「決断」を結果に繋げた、
驕馬の圧巻末脚

「その決断」に、どれほどの葛藤と逡巡があったのだろう。

2016年、ノンコノユメ、4歳の夏。砂の上での比類なき豪脚は、同世代では際立っていた。しかし、前向きすぎる気性ゆえに、持てる力を発揮できないレースが続いたことで、陣営は去勢を決断した。だが、その種牡馬としての道を断つことになる決断にもかかわらず、復帰したノンコノユメの末脚は、鳴りを潜めたままだった。

しかし18年、明けて6歳となったノンコノユメは、鞍上に内田博幸騎手を迎えてGⅢ根岸Sで久々の勝利を挙げる。そして臨んだ、GIフェブラリース。内田騎手は、ノンコノユメが砂を被らないように、馬群から離れた外目のコースにエスコートする。道中は、後方から3頭目。我慢に我慢を重ねた末脚は、直線残り200mで炸裂する。

抜け出した前年の覇者ゴールドドリームと、内から伸びるインカンテーションが馬体を並べる。さらにその外から迫る、ノンコノユメ。内の2頭に並び、そして、差し切った。その圧巻の末脚は、「いま」を走るしかない命が放つ、眩い輝きがあった。血を残せない、6歳驕馬。しかし、歴史に名は残る。閃光のごとき末脚は、観る者の心に残った。

(大寄直人)

生涯 2012年生まれ

性別 騾

毛色 栃栗毛

父 トワイニング

母 ノンコ

母の父 アグネスタキオン

最終戦績 [9-10-5-22]

主な勝鞍 フェブラリース ユニコーンS 武蔵野S
根岸S ジャパンダートダービー
サンタアニタトロフィー

チャンピオンズカップ

かつての名称は「ジャパンカップダート」

中京開催「秋のダート王者決定戦」

2000年、ジャパンCのダート版として創設されたジャパンCダートが前身。創設初期はGI馬リドパレスなど米国勢が多く出走したが、日本のダートと米国のダートの違いが浮き彫りになり、ブリーダーズCとの間隔も考え、徐々に遠征は消極的に。第2回勝ち馬クロフネの東京ダート2100m2分5秒9の衝撃は未だ伝説級（詳細は『競馬 伝説の名勝負2000-2004 ゼロ年代前半戦』）。08年から阪神、14年から中京と舞台変更が続いた。中京移行を機に名称をチャンピオンズCに改称。国際競走というより、その年のダートチャンピオン決定戦というスタンスになりつつある。ダートコースとしては中央10場のうち、東京に次ぐ直線の長さを誇る中京は急坂もあるため、1000m通過タイムが61秒を切ると、差し馬優勢、61秒以上では先行馬優勢と前半のタイムで傾向がくつきり分かれる。中京での最速記録は19年クリソベリルの1分48秒5。反対に最遅記録が14年ホッコータルマエの1分51秒0。中京での最大着差は21年テオーケインズの6馬身。



中京競馬場 ダート1800m

〈レースレコード〉1分48秒5
クリソベリル
2019年12月1日



直線にある坂の途中からスタート。1コーナーまでは約300m、1～2コーナーの角度はきつめ。3コーナー手前から4コーナー過ぎまでは緩やかな下り坂が続く。直線は410.7m。

【私が選んだベストレース】 勝木淳（競馬ライター）

順位	開催日	馬名	選出理由
第1位	第15回 2014年12月7日	ホッコータルマエ	地方交流含めGI格10勝もJRAのGIはこれが最初で最後。地方で培った粘り強さを存分に発揮した。
第2位	第9回 2008年12月7日	カネヒキリ	かつて「砂のディーブ」と称された砂の王者が屈腱炎を克服し、復活。3年もかかって連勝を達成した感動。
第3位	第17回 2016年12月4日	サウンドトゥルー	馬券親父の味方・大野拓弥騎手が大一番で見せた大野スペシャル。インから外へ。最後の直線での挙動は圧巻。

(注) 第2位はジャパンCダートより選出



2014年 第15回

ホツコータルマエ

地方交流が育んだ驚異の粘り、念願の中央GI初制覇！

越えられそうで越えられない壁に立ち向かう果敢なる精神は、どんな場面でも観衆の共感を呼ぶ。みんな、生きている以上、いつかは壁に直面するときがくる。なぜか乗り越えられない難題への苦しみの味は忘れられない。それが挑戦者たちの心の内への共感とともに込みあげ、傷だらけになりながら壁を乗り越えていく勇者の姿を目撃する瞬間、それぞれの心に吹き抜けるそよ風を感じる。その風の清涼感もまた忘れえない。

ホツコータルマエは中央所属ながら、地方交流GI5勝に対して中央GI3、2着。どうしても中央GIという壁に阻まれてきた。スピードが足りない、末脚が足りない。そもそも中央では力が足りないのではないか。中央重賞2勝馬にそんな心ない声もあった。地方交流の雄ホツコータルマエは2014年、3度目の中央GIチャンピオンズCに挑む。

2月のフェブラリース覇者コパノリッキー、この年、地方交流GIを勝ったサンビスタ、ワンダーアキュート、カゼノコ、ベストウォーリアと居並び、そこにJRA重賞ウイナーが

加わる重厚なメンバー構成。名手ケント・デザーモ騎手を配した米国からの遠征馬インペラティヴはすっかり霞んだ。中央のダートチャンピオン決定戦。地方中央天下統一のためにホッコータルマエは是が非でもこの勲章を欲した。

最大のライバルであり、同じ先行型のコパノリッキーがスタートで遅れ、控える形に。クリノスターオーが作るペースは最初の600m 37秒5。リズムを乱す先行勢が多いなか、ホッコータルマエは落ち着き払った走り。幸英明騎手との呼吸は完璧だ。

当然、レースの動き出しは早まる。残り800mからホッコータルマエが果敢に攻める。ベルシャザールとワンダーアキュートの末脚に屈した前年など気にしない。地方交流で培った積極性を中央のGIでも捨てはしない。時と場所によって戦い方を変えられるほど、馬も我々人間と同じく万能ではない。だからここぞという場面では信じた道を行くよりほかにない。先に抜け出したホッコータルマエを追いかけるのはローマンレジェンド。坂を駆けあがった残り200mでそれを振り切ると、次なる矢ナムラビクターが襲いかかる。幸騎手が右ムチで励ます。地方交流をしのぎ切ってきた粘り腰を引き出そうと懸命だ。そんな祈りが通じたか、ホッコータルマエはナムラビクターの急襲を半馬身だけ封じた。これが唯一の中央GIタイトルも、紛れもなくホッコータルマエが果敢なる精神をもって壁を乗り越えた先につかんだ勲章だった。

ダートGI10勝馬が魅
せたJRA・GI唯一の
勝利。父を超える産駒
の登場を期待するファ
ンも少なくない。





2014年 第15回

チャンピオンズカップ

優勝 ホッコータルマエ

生誕 2009年生まれ

性別 牡

毛色 鹿毛

父 キングカメハメハ

母 マダムチェロキー

母の父 Cherokee Run

最終戦績 [17-5-7-10]

主な勝鞍 チャンピオンズC かしわ記念 帝王賞(2勝)

JBCクラシック 東京大賞典(2勝) 川崎記念(3勝)

レパードS 佐賀記念 名古屋大賞典 アンタレスS

2着 ナムラビクター 3着 ローマンレジェンド



2008年 第9回

カネヒキリ

「砂のデーパー」が屈腱炎を克服した
奇跡の復活勝利

カネヒキリは2005年ジャパンCダート、06年フェブラリースを連勝。同じ勝負服、主戦武豊騎手からその強さを同時代の英雄になぞらえ、「砂のデーパー」と称された。しかし4歳秋に屈腱炎を発症、翌年再発。休養はじつに約2年4か月にも及んだ。

08年、カネヒキリは6歳秋に復帰。舞台が阪神に移されたジャパンCダートではさすがに「砂のデーパー」も往年の力なし。ヴァーミリアン、3歳サクセスブロッケン、カジノドライヴに次ぐ4番人気はそんな声のあらわれでもあった。

ティンカップチャリスが内を開けながら主導権を握るといふ展開になり、そのインを突いたサクセスブロッケンが早めに動き、600m通過後から11秒7ー11秒8とペースが落ちない特異な流れ。ヴァーミリアン、カジノドライヴ、メイショウトウコンが動くなか、カネヒキリはサクセスブロッケンの背後に潜み、まるで悟りの境地に至ったかのごとく動かない。それはまさに風林火山。静から動へ。直線に向いた途端にサクセスブロッケンとティンカップチャリスの間を風のごとく抜け出した。トウカイテイオーの有馬記念も感動ものだが、カネヒキリとてジャパンCダートを3年ぶりの出走で連勝。その復活劇は今もって記憶に残る。

生 誕 2002年生まれ
性 別 牡
毛 色 栗毛
父 フジキセキ

母 ライフアウトゼア
母の父 Deputy Minister
最終成績 [12-5-1-5]
主な勝鞍 ジャパンCダート(2勝) フェブラリース
ジャパングランプリ 東京大賞典 川崎記念
ユニコーンS マークユリーC



2016年 第17回

サウンドトウル

巧みな進路取りから炸裂した超末脚
頼れる男の名騎乗

関東の馬券親父にとって大野拓弥騎手は頼れる男。2016年もダート中距離で大穴を捉供。7月16日安達太良Sでは13番人気コアレスキング2着、9月11日トミケンカリム11番人気1着。当時、大野騎手の大穴激走に救われた馬券親父は多い。そんな大野騎手が得意のダート中距離GIチャンピオンズCに出る。そのパートナーはサウンドトウル。最終的に6番人気。6連勝中のアウオーディー、3歳ゴールドドリーム、コパノリッキークラシックから豪華メンバーではそれも仕方なし。だが、一発あるぞと大野騎手に託した馬券親父は多かった。

高木登厩舎のシンボル・幸せを呼ぶ黄色いメンコをまとったサウンドトウルはスタート直後からさっとインに潜り込み、後ろで脚を溜める。力が足りない馬は内に入って、ロスを抑える。大野騎手の得意戦法だ。前はモンドクラッセが飛ばし、コパノリッキークラシックをアウオーディーがマーク。1000m通過は60秒6のハイペース。サウンドトウルは第4コーナーでも依然として最後方インのまま。大野騎手は最後の直線でサウンドトウルを外へ持ち出す。これぞ大野スペシャル。巧みに進路を切りかえ、サウンドトウルはアウオーディーの外に出る。そして末脚炸裂。馬券親父の味方がみんなの頼れる男になった。

(勝木淳)

生 誕 2010年生まれ
性 別 騾
毛 色 栗毛
父 フレンチデビュティ

母 キョウエイトルース
母の父 フジキセキ
最終競績 [13-11-19-25]
主な勝鞍 チャンピオンズC 東京大賞典
JBCクラシック 日本テレビ盃 金盃(2勝)
東京記念

凱旋門賞
第1位

第91回 2012年10月7日

オルフェーヴル (2着)

悲願達成寸前でかわされ：
「世界の壁」の高さを知った夜

世界中のホースマンたちにとって最高峰の舞台、凱旋門賞。日本馬の悲願達成に限りなく近づいたのがオルフェーヴルだった。前年にクラシック三冠と有馬記念を制し、迎えた充実の4歳秋。9月のGIIフォワ賞1着をステップに凱旋門賞に挑んだ。名手クリストフ・スミヨンを背に後方2番手からレースを進める。530mの直線に入り大外に進路をとると、黄金の馬体が弾けるように加速。ラスト300mで先頭に立つや、ぐんぐんと後続を引き離していく。勝った！——日本から深夜のレース中継で応援していたファンの誰もがそう思ったことだろう。ところが、ゴールのわずか手前、外から急襲してきた牝馬ソレミアにかわされ無念の2着。いったんは突き抜けたオルフェーヴルだったが、ゴールが近づくにつれて内側へ斜行。最後に甘くなったところを差された格好だった。また、前日から当日の朝にかけて降り続いた雨の影響で、馬場状態は「重」。勝ったソレミアは「重」と「不良」の重賞で好走してきた、名うての道悪巧者だったのだ。翌日、現地の競馬メディアは「近年で最も不運な敗者」「最も強い競馬をしたのはオルフェーヴル」と評していた。

翌13年に、2度目の挑戦。前年の敗因にもなった斜行癖を矯正するなど念入りな調教が施

生 誕 2008年生まれ
性 別 牡
毛 色 栗毛
父 スティゴールド

母 オリエンタルアート
母の父 メジロマックイーン
最終成績 [12-6-1-2]
主な勝鞍 皐月賞 東京優駿 菊花賞 有馬記念 (2勝)
宝塚記念 スプリングS 神戸新聞杯
フォワ賞 (2勝) 産経大阪杯



日本中の歓声がため息に…「強い競馬をした」オルフェーヴル（左）。

され、前哨戦のフオワ賞を快勝。本番へ向け、1年前に劣らぬ完璧な仕上がりがた。

今度こそ、日本競馬の歴史が塗り替えられるかもしれない。その瞬間を、その光景を直接この目に焼きつけたい——そんな思いで筆者は現地へ飛んだ。パリ・ブローニュの森で見たオルフェーヴルは堂々としていて、美しく迫力ある馬体は他のどの馬よりも輝いていた。

しかし、世界の壁はやっぱり高く、分厚かった。勝った3歳牝馬トレヴに5馬身差をつけられての2着。斤量差による3歳馬有利は凱旋門賞の定説だが、「それでもトレヴが強かった」…レース後の談話でスミヨン是这样語り、勝ち馬の力を認めたのだった。

- 第1位** 日本の三冠馬が世界の頂点に最も近づいた！
第2位 99年以後、凱旋門賞が「夢」から「目標」に。
第3位 最後の差し返しに国民的名馬の真価を見た！

(私が選んだベストレース／五十嵐有希・フリー編集者)

凱旋門賞
第2位

第78回 1999年10月3日

エルコンドルパサー (2着)

「チャンピオンが2頭いた」と
称されたレース

日本の馬で凱旋門賞を勝つ——漠然とした「思い」が明確な「目標」に変わったのは、この馬の激闘がきっかけではなかったか。事実、初めて凱旋門賞に挑んだ1969年のスピードシンボリから「エルコン前」までの30年間で同レースに向かったのはわずか3頭。それが「エルコン以後」は毎年のように、29頭が挑戦（22年まで）を果たしているのだ。

99年の凱旋門賞。前日に豪雨が襲い、レース当日は晴れたものの、歴史的な不良馬場での開催となった。ワールドクラスの強豪が揃うなか、最内枠に入ったエルコンドルパサーはゲートが開くといきなり先頭へ。欧州馬たちの動きに合わせることなく、コンドルは飛び立った。終始2〜3馬身ほどのリードを保ち、手応え十分に4コーナーを回る。直線に向くと、後続をさらに突き放した。日本の馬が世界の頂点へ：そう思われた瞬間、外から猛然と差してきたのが重馬場を得意としていたモンジュー。エルコンドルパサーは100mほど手前で捕まると、食い下がりながらも半馬身差の2着に泣いたのだった。

運はわずかに勝ち馬に味方したが、負けてなお、エルコンドルパサーの強さは明白。現地メディアには「今年はチャンピオンが2頭いた」と称賛するレース評が躍った。

生涯 1995年生まれ
性別 牡
毛色 黒鹿毛
父 Kingmambo

母 サドラーズギャル
母の父 Sadler's Wells
最終種別 [8-3-0-0]
主な種別 NHKマイルC ジャパンC
共同通信杯4歳S NZT4歳S
サンクルー大賞 フォワ賞



第85回 2006年10月1日

デイーブイン・ハクト (3着入線後失格)

史上最強馬デイーブ
無念の3着入線

史上2頭目となる無敗の三冠馬となった翌年、日本中の夢を乗せて向かった凱旋門賞。デイーブインハクトは最内枠から道中2〜3番手でレースを進めるも、その直後からびったりとマークしていたレイルリンクに残り200mで並ばれると、最後方で待機していたプライドにもゴール直前で差され、無念の3着入線。日本人ファンの悲鳴が上がった。

後日、このレースを現地で中継していた岡部幸雄氏に話を聞く機会があった。岡部氏は「一番の不運は、出走頭数が少なかったこと」と語る。例年は頭数が揃う凱旋門賞だが、この年はわずか8頭立て。レースを引っ張るペースメーカーがおらず、前に行かざるを得ない形になった。デイーブを筆頭に強豪が揃い、回避馬が続出したことが皮肉にも裏目に出たのだ。「1番人氣を背負い、読まれてマークされて、厳しい展開になった。馬の状態は万全でも、どんなに手応えがよくても、ああいう形になってしまうと案外伸びないものなんだ」

それでも、大勢決したかと思われた残り100mで、レイルリンクを再び差し返す闘いぶりには鳥肌が立った。その後の禁止薬物騒動で、残念ながら3着も返上し「失格」の記録が残るのみだが、その健闘は凱旋門賞における日本馬の確かな1ページである。(五十嵐有希)

生誕 2002年生まれ

性別 牡

毛色 鹿毛

父 サンデーサイレンス

母 ウインドインハーヘア

母の父 Alzao

最終戦績 [12-1-0-1]

主な勝鞍 皐月賞 東京優駿 菊花賞 天皇賞・春
宝塚記念 ジャパンC 有馬記念 弥生賞
神戸新聞杯 阪神大賞典

香港
第1位

第8回 香港ヴァーズ 2001年12月16日

ステイゴールド

日本競馬の名脇役
香港でいざ主役の座へ

激動たる世紀末の日本競馬を、いつも少し後ろから見届けてきたステイゴールド。GIを勝つことはなくとも、小さな体で何度も上位争いに食い込んできた。21世紀を迎え、ようやく重賞を勝った頃にはもう、ともに走った名馬たちはみんな引退してしまっていた。

そんなステイゴールドの長旅も、とうとうおしまい。香港ヴァーズで引退する。このレースは毎年12月に香港のシャティン競馬場で異なる条件のGIを行う「香港国際競走」のひとつで、世界中から実績馬が集結する。ランフランコ・デットーリ騎乗のエクラーや、当時2400mの世界レコードを記録したといわれるレースの2着馬リテイガドなどが集う中、1番人気はステイゴールド。不思議なことでもない。これまで天皇賞春・秋2着、宝塚記念2着、有馬記念3着と数々の善戦を重ねてきた。紛れもなく日本屈指の実力馬だ。

ひとつひとつの場面が、彼の競走生活最後のものになっていく。エクラーが先頭で淡々としたペースを刻む中、ステイゴールドは中団からライバルたちを見送っていた。最後の直線でも、しっかりと2番手まで押し上げてきた。けれど遠く先のエクラーは、まだまだ余力を漲らせている。これまで何度も繰り返した場面に重なった。最後が2着でも、彼らしいの

生 誕 1994年生まれ
性 別 牡
毛 色 黒鹿毛
父 サンデーサイレンス

母 ゴールデンサッシュ
母の父 ディクタス
最終競績 [7-12-8-23]
主な勝鞍 香港ヴァーズ ドバイシーマクラシック
目黒記念 日経新春杯



ゼッケンに刻まれた現地名「黄金旅程」。旅の締めくくりはGI初勝利で。

かもしれない。けど、何か違った。エククルとの差がみるみるうちに小さくなっていくのだ。次第に差は詰まり、ついには並びかける。熾烈な叩き合い。ほとんど並んでゴールに飛び込んだ瞬間、世界の喝采が日本馬めがけて降り注いだ。鞍上の武豊が何度も拳を突き上げた。ゴールに飛び込む最後の一步、競走生活最後の一步で、ステイゴールドは頭ひとつ分エククルをかわしていたのだ。はるばる応援にきた日本人たちが泣いていた。本当に愛された馬だ。苦しいこともあっただろう、でも今ではそれすら愛おしい。興奮気味に観衆のもとへと戻ってくるステイゴールド。その時確かに彼は、最初で最後の大きな殊勲を携えていた。

- 第1位 世界が祝福した日本馬のハッピーエンド。
第2位 日本のマイルチャンピオン、世界の頂点へ。
第3位 アジア屈指の短距離大国で比類なき快挙。

(私が選んだベストレース/手塚瞳・ウマの書記係)

香港
第2位

第25回 香港マイル 2015年12月13日

モーリス

日本と香港のマイル王が
国際舞台で散らした火花

春秋ふたつのマイルGIを制したモーリスが、香港マイルではじめて世界に挑む。果たして日本のマイル界のトップホースはどれほど通用するのか、日本のマイル戦線そのものが試されるようなものだ。つくづく国内チャンピオンの海外初戦とは気が気でなくなる。

対するは香港で無敵のマイラー・エイブルフレンド。香港内のマイルGIを次々制覇、もはや香港に敵無しと、より強い相手を求めて海外に挑んだこともあるという。

そんな馬でもモーリスは一目置く存在なのだろう。レース本番、エイブルフレンドは終始じつくりとモーリスを真後ろからマークする。2頭は前後に並んで機をうかがう。最後のコーナーで馬たちが一塊となった時、ようやく両者は横に並んだ。互いに敵は互いのみか。いつものスパートを仕掛けるエイブルフレンド。確かに勢いが違う。でもそれ以上にモーリスが段違いだった。先行くエイブルフレンドを軽々かわし、先頭のままでゴールまで突き抜けた。エイブルフレンドはまるで怖気付いたかのように失速、後続にも先着を許してしまった。無情なまでの強さ。「世界のモーリス」の夜明けであった。翌年もモーリスはシャティン競馬場で行われた国際GIに2度出走、いずれも圧勝している。

生 誕 2011年生まれ
性 別 牡
毛 色 鹿毛
父 スクリーンヒーロー

母 メジロフランシス
母の父 カーネギー
最終戦績 [11-2-1-4]
主な勝鞍 安田記念 マイルCS 天皇賞・秋
香港マイル チャンピオンズマイル
香港C ダービー卿チャレンジT



第14回 香港スプリント 2013年12月8日

ロードカナロア

日本屈指の名スプリンターが
短距離王国で連覇達成

シャティン競馬場には香港の伝説の競走馬・サイレントウィットネスの銅像がある。かつて香港中が沸いた短距離王を讃えて作ったものだ。6歳までGI8勝を含む17連勝、日本のスプリンターズSも制している。彼を筆頭に、これまで香港競馬はアジア屈指のスプリンターを数多く輩出してきた。それゆえ香港国際競走の1200m戦・香港スプリントだけは地元勢が圧倒的に強く、長らく日本馬も太刀打ちできなかった。

ところが2012年、ついに日本のロードカナロアが悲願の香港スプリントを制覇したのだ。さらに翌年も1番人気、連覇が期待された。ライバルには前哨戦の上位組や過去に同レースを制したラッキーナインらが揃い踏み、短距離王国のプライドにかけて連覇を阻みにくるだろう。けど、何もかも杞憂だった。ロードカナロアにとって2度目となる香港の最後の直線、まだ残り300mも残すところで先頭に立ち、そのまま後続を5馬身離して完勝した。02年のGI昇格以来、ロードカナロアの登場まで外国馬は1勝しかできなかった。加えて連覇した馬は香港勢でも先のサイレントウィットネスのみ。短距離王国の歴史に2度刻まれた日の丸とロードカナロアの名は、今も燦々ときらめき続けている。

(手塚瞳)

生 誕 2008年生まれ
性 別 牡
毛 色 鹿毛
父 キングカメハメハ

母 レディブラッサム
母の父 Storm Cat
最終戦績 [13-5-1-0]
主な勝戦 スプリンターズS (2勝)
香港スプリント (2勝) 高松宮記念
安田記念 京阪杯 シルクロードS 阪急杯

ドバイ
第1位

第16回 ドバイワールドC 2011年3月26日

ヴィクトワールピサ

重苦しく悲痛な空気が漂った日本
中東から届いた大金星のニュース

2011年3月11日14時46分、東日本大震災が発生。

競馬界も、福島競馬場でスタンドの天井が崩落するなど大きな影響を受けた。週末のレース開催も取りやめとなり、中京記念やフィリーズレビュー、阪神スプリングジャンプなどが順延。皐月賞トライアルでもあるスプリングSも、3月20日(中山)の開催予定から3月26日(阪神)というスケジュールに変更となる。そこで重賞初制覇をあげたのは、当時デビュー5戦1勝のオルフェーヴルで、未来の三冠馬が本格化した走りを見せた日でもあった。そして同じく3月26日、ドバイではドバイワールドカップデーが開催された。

日本から様々な想いを胸に大舞台に降り立った名馬たちのなかに、オルフェーヴルのひとつ歳上の皐月賞馬、ヴィクトワールピサがいた。

ヴィクトワールピサは、歴代屈指の強豪が揃った世代において、トップクラスの評価を受けていた。しかしスローとなったダービーで敗北すると、果敢に挑戦した凱旋門賞でも結果を残せず大敗。だが、そこから年内GIを2戦していずれも好走したことが、彼の評価を難しいものにしていった。しかしヴィクトワールピサ陣営は、挑戦を続けた。

生 誕 2007年生まれ
性 別 牡
毛 色 黒鹿毛
父 ネオユニヴァース

母 ホワイトウォーターアフェア
母の父 Machiavellian
最終種別 [8-1-2-4]
主な種別 皐月賞 有馬記念 ドバイワールドC
弥生賞 中山記念 ラジオNIKKEI杯2歳S



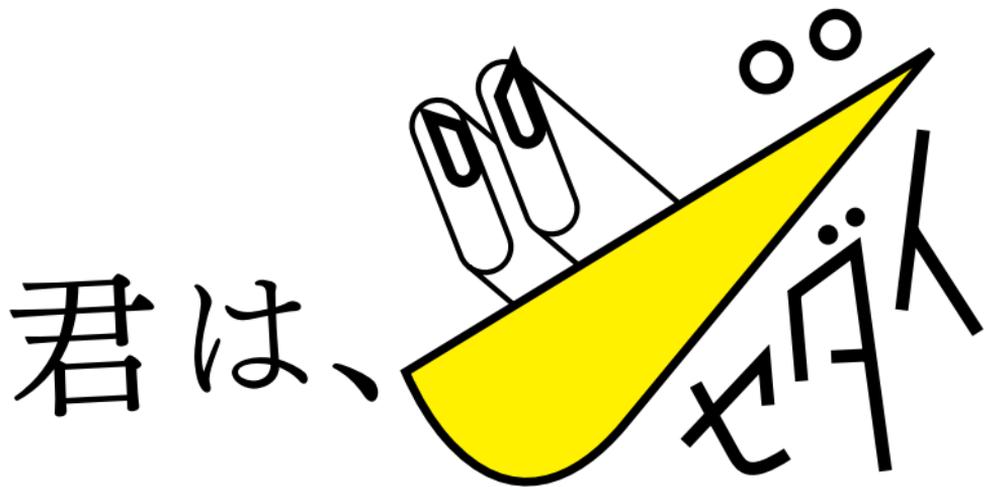
GI2勝馬とダート王のワンツーフィニッシュ。

震災に悲しむ日本国内を明るくしてくれたヴィクトワールピサの走りだった。

当時のドバイワールドCは転換期にあり、10年からはオールウェザーというダートでも芝でもない特殊な馬場で開催されていた。レースはダート実績馬トランセン드가引つ張る展開に。ヴィクトワールピサは最後方からレースを進めていたが、ペースを見て鞍上のデムーロ騎手がポジションを押し上げる。道中で早くも先頭に並ぶと、直線では日本馬2頭によるデッドヒートが繰り広げられた。軍配が上がったのは、ヴィクトワールピサ。その後は怪我などに苦しみ引退まで評価は難しいままだったが、それもまた果敢な挑戦の結果だろう。つらい雰囲気立ち込めていた当時の日本へ、勇気を与えた名馬であることは間違いない。

- 第1位** 震災直後の日本に中東から勇気を届けた。
第2位 国内外で注目を集めた個性派が才能を発揮。
第3位 運味きの天才が世界1位を手にした独走劇。

(私が選んだベストレース/緒方きしん・「ウマフリ」代表)



何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!